

# 井手英策教授

専門：財政社会学

(インタビュアー：大槻茉椰)

*「財政社会学は社会と財政を結びつける学問」*

「先生の専門とされている財政社会学について教えてください！」

財政の変化を歴史的に分析しながら、社会の変化じたいを解き明かす、あるいは社会の価値や認識の変化をとおして財政制度の変容を読み解く、これが僕たちの学問です。

例えば、20年かけて税の安い国になったとするよね。それはパッと見るといいことに思えるかもしれない。でも、国家や政治家が国民の信用を失って税を取る力をなくしたのかもしれないし、他者のために痛みを共有することを社会が拒む、分断された状況が生まれたのかもしれない。このように社会と財政の関係変化は、社会のありかたそのものの変化と結びついているんだよね。

僕たち財政社会学者は総合的な学問、統合の学を追求したいと思ってる。いまの社会科学は細分化が進んでいるからね。円柱は真上から見たら円だけど、横から見たら長方形に見える。でも真実はそれが円柱だということだよ。社会科学の分析対象である社会もおなじ。それを理論的に、定量的に分析する人がいてもいいと思うし、国際比較をする人もいていい。でも、大切なことは、それぞれの成果を吸収しながら、社会の実像に近づいていくこと。僕は歴史という長期的な変化をよりどころにして、さまざまな研究成果を統合する学として、財政社会学を発展させたいと思ってる。

*「人間は運で左右される生き物。運不運で変わってしまう事象こそ学者が戦う」*

「先生の授業って、とってもあたたかい気がします。その源はなんですか？」

自分の無能さを知っているからじゃないかな。人間って一人の力でだれかを幸せにできる

ほど、強くも、えらくもないよね。僕はいままで3回死にかけたことがあるのね。3回も死にかけると、さすがにいかにか自分が無力か、そして運・不運で人生が左右されるかということが分かるよね。僕なんてまったく運良く生き延びただけだから。

変なこと言うけど、僕はいますごい幸せなのね(笑)家族や仲間たちがたくさんいて。でも、運が良かっただけで幸せになれたのなら、運が悪かっただけで、ものすごく悲しい目にあっている人がいるって気づくじゃない？

「生まれた家が貧乏だった」「生まれたときに障がいがあった」こんなの100%運だよ。そんな運で一生が決まる社会はおかしい。理不尽だし、不条理だよ。この前、講義で「田舎から来た子、手をあげて」って聞いたのね。すると100人くらいの学生のなかで手をあげたのはたった一人だった。生まれた時に貧乏ではなく、障がいもなく、都会で育った・・・これって明らかに運の良い人だよ。そんな人たちしか慶応に行けない社会って君はどう思う？明らかにおかしいよ。

「私は努力しました」って思ってるでしょ(笑)？でも、もし貧乏なうちに生まれて、塾も何もない田舎に君たちが生まれたとき、同じ努力で慶応に来れたと思う？僕は思わないね。

「理(ことわり)」にしたがって生きる学者だからこそ、全知全能をかけて闘わなければいけないものがあると僕は思っている。学者は理屈で生きている。だから、あるべき論、筋論を徹底的に論理的に考え、世に問うべきだと思う。理屈で考え抜いて、未来の社会を構想する。それは学者にしかできないことなんだから。こんな思いが君のいう「あたたかさ」の原因なのかもしれないね。どっちかというところ「熱苦しさ」だと思うけど(笑)

### 「常に最先端の授業を」

#### 「先生は授業をするとき、どんなことを考えていらっしゃいますか？」

絶対に去年と同じ話はしない。財政社会学を学ぶものとして国内でも、外でも、先端でいたいからね。教科書をまとめることは大事。でも僕にはまだそのときじゃない。だからその瞬間にたどり着けている知見で授業を組み立てている。全体の4割くらいは毎年書き換えているよね。ゼミの運営も同じで、毎年4月になると去年の反省から始まり、どのようにゼミの運営を変えていけばいいかということ必ず学生と話して、一年をスタートするようにしています。

*「死ぬときに色々な思い出が駆け巡る人生を生きて欲しい」*

**「先生の若い時の経験について教えてください！」**

小学校は国立の学校に通ってたのね。で、地元の有名中学を受けたら落ちちゃって。そこからダラダラ生きてたんだけど、中3になったとき覚醒したんだよね。このままじゃ人生終わるなって。あいつらに負けっぱなしじゃんって。そこから、一日4時間以上寝ないって決めた。生きてる限り勉強してやろうと。お袋に泣かれたよ。頼むから勉強やめてくれって。一年で140日くらい学校も休んだかな。もう完全に不登校（笑）

ふた月くらいで福岡で1番になった。そして鹿児島の高校に入った。いま思えば中3が人生の分かれ道だった。勉強が好きだったわけじゃないし、勉強をやれっていいたいわけでもない。でも、死ぬほど徹底的に何かやるって大事かもね。たとえ人に迷惑かけても、バカにされても、脇目も振らずやり倒すっていう経験。

そうやって大学からいまにいたるまで、キャリア的には隙のない人生を送ってきたと思う。でもね、2011年に脳内出血で死にかけたときにショックなことがあったんだよね。よく「走馬燈のように思い出が駆け巡る」っていうじゃない？なのに何も浮かばなかったんだよね。ぞっとしたよ。勉強ばかりで。競争ばかりで。中身のない生き方をしていたんだ。思い出らしい思い出、思い出したい何かがない。

そこからかな。家族と過ごす時間を大事にするようになったのは。僕はね、死ぬときに色々な思い出が駆け巡る人生がいいと思う。悔しいことや、うれしいことや、泣けること、いろんなこと。君たちも人生がまだ60年以上あるんだから、生きかたを変えるには十分すぎるくらい若い。何が自分にとっての幸せか、もう一度、考えてみるのもいいかもしれない。

*「今の大学生には自由がある。これからどう人生を切り開くかが大切」*

**「先生から見た現在の大学生の印象、また慶應生の印象を教えてください！」**

僕たちが若かったときよりもずっと自由だと思う。選択肢が沢山あるし、しばられていない。僕たちの時代は、いったん会社に入ったら勤めあげるのが常識だったけれど、いまの時代は移動するのも自由だしね。僕たちの時より不安定だけど、ずっと自由な気がするね。

ただ、本当にエリートであろうとする意識がよわい気がするかな。もったいないよね。僕たちの時より自由だけど、せっかく自由になったのにみんな似たような行動をとっている。そ

こがもったいない。僕にとってのエリートって「人のやらないことをやって、自分のポジションを作りあげていくひと」。それは怖いし、しんどいこと。でも、自分の生を生き、自分の死を死ねない人がエリートになれるとは思わない。フロントランナーになって欲しい。だって誇り高き塾生なんでしょ？

*「どんな人になりたいかを考えられる人に来て欲しい」*

**「井手ゼミを志望する学生に求めるものを教えてください！」**

なりたい自分を自分なりに考える。そのなりたい自分になろうと頑張る。そんな学生。子どもときの自分から「あんたカッコいいわ」って言ってもらえるような、そんな学生。

*2年生へのメッセージ！*

**「最後にゼミ選びをする2年生に向けてメッセージをお願いします！」**

学んで生きる、と書いて学生だよ。何を学びたいかという基準でゼミを選ぶ。それでいいと思う。でも、同時に、生きかたも問われているってことに想像力を働かせてほしい。そもそも学んで生きるということじたい、生きかたの問題なんだから。「徹底的に学んで、生きる」のもいい。でもさ、「学びながら、徹底的に生きる」のもいい。そんな観点からゼミを選ぶのもいいんじゃないかな。僕は徹底的に生きる学生を応援したいし、僕もそんな「学生」と一緒に、精一杯生きていきたい。

「お時間を割いてくださり、どうもありがとうございました。貴重なお話が伺えて、とても嬉しいです。」

## 編集後記

大学の講義を始め、テレビ出演に講演会、本の出版とご多忙なスケジュールの中で時間を割いてくださいましたこと、井手先生には誠に感謝致します。

私自身、井手先生の授業を大変興味深く聞いている学生の一人なのですが、今回はそんな井手先生の人生観のようなものに迫りたいという思いでインタビューさせていただきました。記事をお読み頂く皆様には、先生のおっしゃる通り、ぜひこれからの生き方・何をして生きていきたいか、ということも視野に入れながらゼミ選びをして頂きたいと思います。